

### Ⅲ 奈良県の子どもの実態に応じた指導のための資料・事例

#### 1 幼児期の子どもの体力向上

##### 資料編

(1) 全国調査からみた幼児の運動能力の年次推移 表やグラフから分かること

幼児を対象とした全国調査から、1986年から1997年にかけての約10年間には、すべての種目にはっきりした低下が認められる。

	男 子				女 子			
	年齢	1986	1997	2002	年齢	1986	1997	2002
25m走 (秒)	4歳前半	7.54	8.01↓	8.12↓	4歳前半	7.84	8.31↓	8.34↓
	6歳前半	6.20	6.29↓	6.26↑	6歳前半	6.38	6.47↓	6.43↑
立ち幅跳び (cm)	4歳前半	85.4	77.8↓	75.0↓	4歳前半	80.2	70.4↓	69.2↓
	6歳前半	116.1	113.6↓	112.4↓	6歳前半	107.3	103.2↓	101.3↓
ソフトボール投げ (m)	4歳前半	4.0	3.2↓	3.3↑	4歳前半	2.8	2.3↓	2.4↑
	6歳前半	7.8	7.1↓	7.0↓	6歳前半	5.1	4.7↓	4.6↓
両足連続飛び越し (秒)	4歳前半	7.32	9.07↓	8.45↑	4歳前半	7.21	9.22↓	8.32↑
	6歳前半	5.30	5.60↓	5.34↑	6歳前半	5.23	5.67↓	5.44↑
体支持持続時間 (秒)	4歳前半	26.7	18.8↓	16.0↓	4歳前半	27.7	19.6↓	16.3↓
	6歳前半	59.1	55.3↓	54.4↓	6歳前半	60.6	56.7↓	55.1↓

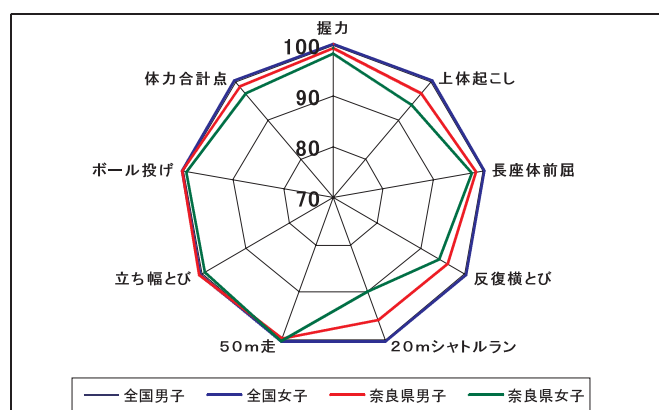
[↑前回調査より上昇 ↓前回調査より低下]

杉原隆 他：幼児の運動能力発達の年次推移(2002.1997.1986年)

(2) 全国体力・運動能力、運動習慣等調査からみた奈良県の子どもの現状

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果から、本県の子どもたちは、運動能力に関する調査のほとんどの種目で、全国平均を下回っている。

運動能力に関する調査



[全国平均を100とする]

平成21年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査〔小学5年生〕(文部科学省)

本県の子どもたちは、全国に比べて運動時間が短い。

運動やスポーツをするときの1日の実施時間 (％)

	30分未満		30分～1時間		1時間～2時間		2時間以上	
	奈良県	全国	奈良県	全国	奈良県	全国	奈良県	全国
男子	11.3(31)	11.7	18.0(14)	17.1	25.3(18)	25.1	45.3(29)	46.1
女子	24.6(20)	23.8	30.6(6)	28.5	24.0(23)	25.3	20.8(36)	22.4

[表中( )の内の数値は、本県の全国順位を示す]

平成21年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査〔小学5年生〕(文部科学省)

### (3) 「幼稚園教育要領」における関連する内容等

子どもの運動能力の低下が指摘されていることを踏まえ、幼児が体を動かすことの気持ちよさを十分に体験することを通じて幼児が自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすることが、幼稚園教育要領の改訂において新たな内容として追加された。

幼稚園教育要領、幼稚園教育要領解説より抜粋

## 第2章 ねらい及び内容

### 健康

#### 3 内容の取扱い

- (1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。  
(~~~~~新たに追加された内容)

(幼稚園教育要領解説より抜粋)

…幼児は様々な環境に取り組んで活動を展開することを通して、様々な場面に対応できるしなやかな心の働きや体の動きを体得していく。さらに、自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体を育てることは、困難な状況において、その幼児なりにやってみようとする気持ちをもつことにつながる。

また、教師や友達との温かい触れ合いの中で、遊びを通じて体を思い切り動かす気持ちよさを味わうことを繰り返し体験し、次第にいろいろな場面で進んで体を動かそうとする意欲が育つように、教師は幼児が自然に体を動かしたくなるような環境の構成を工夫することが大切である。

**事例6 十分に体を動かさず気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲を育てる****(1) 幼児が自ら体を動かして遊ぶことを楽しむことに対する本園の考え方**

幼児が自ら体を動かして遊ぶことを楽しむようになるには、基礎となる動きをたくさん経験し、楽しさを十分味わわせていくことが大切である。その経験が礎となり、年長児になるといろいろな動きを自分で組み合わせたり発展させたりしていくことができる。同時に、それらの力を付けていくことで、自分の体を危険から守る力を育てていくこともできると考えた。

日常の活動の中で継続的に取り組む。

幼児が基本的な運動能力を身に付け、「体を動かすことが楽しい」と感じる子どもに育てるためには、教師が日常の活動の中に、どのような動きがあるのか知り、どのような運動経験が必要かなどについて長期的な見通しをもっていることが必要である。そのことを踏まえ、日常の活動における環境を構成し、援助を行うことを教職員で共通理解している。

基礎となる体の動きを十分経験する。

幼児は、発達が未分化で自分の体をどう動かせばよいのか、どう使ったらよいのかなど、まだ分かっていないことが多い。

いろいろな部位を意図的に動かして遊ぶ。

入園当初は、遊びの中で、基礎的な体の動き（歩く・走る・止まる・跳ぶ・転がるなど）を十分に取り入れていくことが大切である。特に、体のいろいろな部位を動かして遊べる環境を意図的に設けた中で幼児が遊ぶことで、自分の思いにあう体の動かし方を身に付けていく。教師は、幼児が体の部位を意識して動かす遊びを取り入れ、幼児が、ふだん意識していない自分の体を感じる遊びをしようとする意欲を育てることが大切である。

工夫された環境の中で遊びを持続する。

幼児が「遊びが楽しい」と感じるためには、身近なものを利用して幼児が興味をもてるようにしたり、遊びが持続できる工夫をしたりすることが大切である。また、教師は幼児の育ちを見逃さずに認め、そのことを他の幼児にも知らせ、できた喜びを友達と共有できるようにしている。その積重ねが、幼児の成就感や次への挑戦意欲を高めることにつながっていくと考える。

できた喜びを教師や友達と共有する。

## (2) 体のいろいろな部位を使う遊び

### ア 「新聞紙をのせよう！」 体でバランスを取って遊ぶことを楽しむ。



T 「こんなのできるかな？」と、小さくたたんだ新聞紙を頭に  
乗せる。

A 「できるわ。」と、自分も頭に乘せて「のった。」と大喜び。

B 「すぐ落ちるわ。」

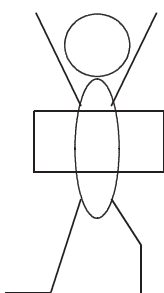
C 「ちょっとだけ歩けたよ。」

どの子も頭の上を気にしながら、バランスを取っている。

T 「川を渡ってみようよ。でも、新聞紙を落とさないようにね。落ちたらぬ  
れちゃうよ。」

体をまっすぐにしたり、落ちそうになると首や体でバランスをとろうとしたり、歩く速度や歩幅を調整するとよいことに気付いていた。姿勢をまっすぐに保ちながら歩こうという気持ちが感じられた。また、背中に乗せて歩くなど、いろいろな部位に乗せて楽しく遊ぶ幼児の姿も見られた。

### イ 「新聞紙をくっつけよう！」 走って遊ぶことを楽しむ。



T 「魔法のおまじないで、この新聞紙が体にくっつくんだよ。」

A 「ほんと？」

B 「うそや。くっつかへんわ。」

T 「じゃあ、みんなに魔法の呪文を…。××××、××××！」

C 「やっぱり、くっつかへんよ。」

T 「おかしいなあ？先生もやってみるわ。」と、お腹に新聞紙を  
あてて、両手を上げて走り出す。

D 「ほんまや。落ちへん。」「ぼくもする。」と、運動場を走り出す。

幼児たちは、走ったり止まったりして新聞紙が体から落ちないためには、どのように走ればよいのか試しながら遊び始めた。「走るのしんどい。」と、言っていた幼児もこの遊びでは、新聞紙を落とさないようにゴールしようと楽しんで走っていた。自分から速く走ることを楽しむ遊びとなった。

### ウ 「ハンカチ(タオル)つかみ」 足の指を使って遊ぶことを楽しむ。

ふだんはあまり意識しないでいる足の指を使って遊ぶ。

T 「手でつかむのはやさしいのに、足でつかむのって  
難しいね。」

と、幼児の前で足の指でハンカチをつかみはじめると、



幼児も興味をもち始めた。手遊び感覚でみんなが一緒に試しながら遊ぶことにした。

初めは、なかなか思うように足の指を使えなかった幼児も徐々に動かせるようになってきた。遊びを繰り返す中で、次第にどう動かしてよいのか分かってきたようで、ハンカチをつかめる幼児が増えてきた。

A「30まで落とさんとつかめたで。すごいやろ。」

短時間でできる遊びなので、降園前や活動後の手遊びの代わりに取り入れることができる。継続することで、幼児は、足の指で上手に物がつかめるようになってくる。土踏まずの形成や浮き指（指と指がくっつき全ての指が床に着いていない状態）対策にも有効であると考ええる。

### エ 「クモの巣遊び」 意識して体を動かしながら、遊ぶことを楽しむ。

遊具に細めの平ゴムをいろいろな高さに張っておく。

登園してきた幼児が早速見つけ、「先生、あれなに？」と、興味を示す。

T「みんなが帰ってしまってから、クモの巣が張ってしまったのよ。」

A「行ってくる。△△ちゃんもいこ。」

T「ひっかかったらクモに捕まえられるから、クモの巣にかからないように気を付けてね。」

「分かった。」と、運動場に飛び出していった。幼児たちは、体を低くしてくぐったり、足を高く上げて跨いだり、体をねじったりしながらクモの巣遊びを楽しんでいた。



幼児は、クモの糸の高さを意識しながら、体を曲げたり頭を低くしたり、下を這ったりしているが、中には思うように動けずクモの糸にひっかかってばかりの幼児もいる。そんな幼児もクモの巣遊びを繰り返していると、糸の高さと自分の体の高さや、動きが少しずつ分かってきたようで「ひっかからへんかったよ。」と、うれしそうにゴールできるようになってきた。体の調整力や瞬発力を身に付けるためにも有効であると考ええる。

### (3) 継続して行いたい遊び「鬼ごっこ」

#### ルールを考えたり工夫したりして遊ぶことを楽しむ。

幼児は、追いかけられたり追いかけたりするのが大好きである。鬼ごっこは、ルールが簡単で分かりやすく、年齢や経験に合わせて変化したり、幼児たちが新しいルールを考え出したりして友達と一緒に遊べるバリエーションをもつ遊びである。また、遊びながら走る・止まる・身をかかわす・鬼の動きや友達の動きを見ながら動きを瞬時に判断する・素早く動くなど、経験を積み重ねるにしたがって様々な動きの基礎となる力が育つ遊びでもある。年間を通して継続的な遊びとして指導計画の内容に位置付けている。

## 幼児が経験した「鬼ごっこ」のいろいろ

初めは、教師が鬼になり追いかけて幼児は逃げることを楽しむ。

少し遊びが分かるようになって、鬼を交代することを教師が提案する。いつも捕まえられたり、鬼になりたくてわざと捕まったりする幼児がいるので、タッチされたら、みんなが鬼になって残っている幼児を捕まえるようにする。  
(子増やし鬼)

新聞紙やなわとび・タオルなどをズボンの腰にはさんで“しっぽ”にして取り合う。しっぽをめがけて走る幼児、取られないように身をよじったり方向を急に換えたりする幼児がいて、何度も経験すると、動きが速くなっていく。(しっぽとり鬼)

鬼にタッチされると、体を凍らせて固まる。仲間の幼児に足の間をくぐってもらったら氷がとけて、再び逃げるができる。全員が凍ってしまうと鬼の勝ち。走る・全身に力を入れて固まる・くぐるなどの動きを楽しみながら遊べる。(こおり鬼)

この頃になると、自分たちでルールを工夫し、遊びを考え出すようになってくる。

鬼が色の名前を言うと、他の幼児は、その色のついた遊具やまわりの物を見つけて触る。触っていないければ鬼にタッチされる。つかまれば、鬼を交代する。触っている時間を決めるなどして遊べる。  
(色鬼)

地面より少し高いところ(遊具やタイヤの上など)に登ると、鬼にタッチされない。長い間登っているとゲームが進まないで、登っている時間を決める。(5まで数えると降りて逃げるなど)  
(高鬼)

ひょうたんの形を地面に描き、鬼は外側から中にいる幼児にタッチする。タッチされた幼児は外に出て鬼が交代する。遊び込んでいくと、よりスリルを楽しめるような形を自分たちで描いて遊ぶようになる。  
(ひょうたん鬼)

幼児はただ走るだけでなく機敏に方向を変えたり、身をかわしたりできるようになってきた。また、遊びに夢中になり、意識せずに長時間走って遊ぶようになってきている。

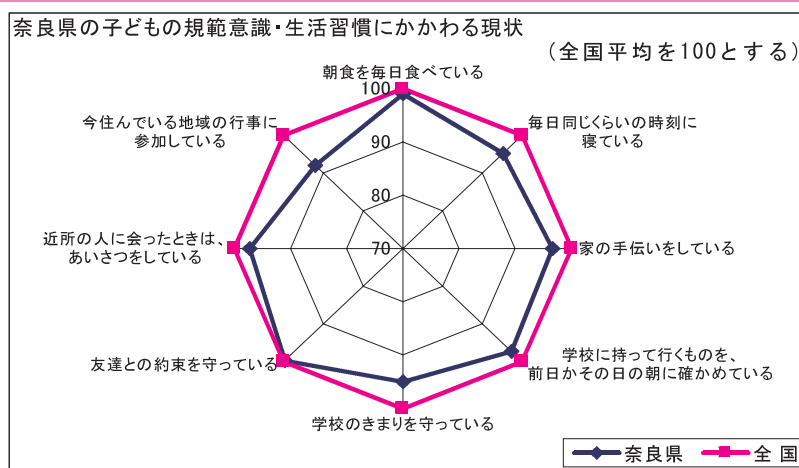
## 2 社会性の基礎・規範意識

### 資料編

表やグラフから分かること

#### (1) 全国学力・学習状況調査からみた奈良県の子どもの現状

本県の子どもたちは、全国平均に比べて規範意識・基本的な生活習慣が低い傾向にある。



平成21年度全国学力・学習状況調査 (小学6年生)

#### (2) 社会性の基礎をはぐくむ

社会全体の人間関係の希薄化が進む中、社会生活や家庭生活の変化による幼児たちの様々な体験が不足してきている。全国学力・学習状況調査の結果からも、社会性や規範意識・基本的な生活習慣等に課題があることが明らかになっている。生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児期から、このような課題を踏まえて指導を行うことが大切である。

県立教育研究所が平成15年度に作成した指導資料「社会性の基礎をはぐくむ～事例から考える保育の視点～」から社会性の基礎をはぐくむための保育のポイントについてまとめた箇所を次に抜粋する。(指導資料全体は <http://www.nara-c.ed.jp/katei/youkyouhp/siryousyuu/hoiku/hoiku.htm> からみることができる。)

幼児期の遊びは、遊びそのものを目的とし、それ自体に価値があるとともに、人のかかわりを体験的に学んでいく機会であり、社会性の発達にも大きな影響を与える。特に幼児期において、一人遊びから集団遊びへと遊びが発展していく中で、社会性の基礎を意図的・計画的にはぐくんでいく必要がある。

#### 指導者に必要な五つの姿勢

- ① 幼児との信頼関係を築く。
- ② ルールやきまりの大切さに気付かせる。
- ③ 指導者は幼児のモデルである。
- ④ 発達段階に即した幼児理解に努める。
- ⑤ 家庭との連携を大切にする。

## ① 幼児との信頼関係を築く

幼児の遊びでは、「よいこと・悪いこと」、「自分の気持ちを素直に出すべき場面」での自己表現、自己抑制の力に大きな個人差がみられる。そのため、指導者がほめたり叱ったりするなど、適切に保育しようとする場合には、幼児との間に信頼関係が成り立っているかどうかが重要になる。

指導者からみて、幼児が友達の嫌がるような行いをしていたとしても、その時々状況によってその意味の異なることはよくあることである。したがって、幼児の思いをしっかりと受けとめ、その子なりの言い分を十分に聞くことがとても大切である。信頼関係があるからこそ、指導者の毅然とした態度や言葉が幼児の心にすんなりと受け入れられることになり、指導者の気持ちもしっかりと伝わるのである。

つまり、保育の営みは信頼関係を築いていく営みであると考えることが大切である。

一方、幼児自身が相手を大切に思い共感する力や、人間関係を調整し、築いていく力は、友達や指導者など周囲の人を信頼する経験を豊かに積んでいくことが出発点となる。このことは、人権教育で大切にされている「人権を尊重する主体を育てる教育として」の側面（奈良県教育委員会『人権教育推進プラン』）からみても、自尊感情の育成という点で密接な関係がある。

## ② ルールやきまりの大切さに気付かせる

ルールやきまりは、人間がつくり出した文化の一つである。幼児期に社会性の基盤をはぐくむ場合、ルールやきまりなどの約束事について体験的に学ぶ場面や集団参加を促す場面を積極的に設定していくことが大切である。代表的なのは、ルールに従った集団遊びの場面である。また、日常生活において様々なきまりにふれる場面でも、体験的に学ぶことができる。

その際、ルールやきまりの意味や公正さについて感じ取らせたり考えさせたりすることが大切である。したがって、「〇〇しては、いけません。」といった指導者の表面的な言葉かけで終わるのではなく、「なぜしてはいけないのか」などと、発達段階に即しながら幼児の心にまで届く意図的な保育が大切となる。そして何より、「ちゃんと守れたね。」といった言葉かけを指導者が常に心がけることで、ルールやきまりを守れた自分を好きになり、自分に自信をもつ、すなわち、幼児の自尊感情を高めていくことができるのである。

さらには、遊びの中で自分たちでルールをつくり、それを守っていこうとする態度を認め、励ましていくことが、社会性を大きくはぐくんでいくことにつながる。



### ③ 指導者は幼児のモデルである

指導者は保育しながら幼児を観察しているが、実は、幼児も関心や憧れをもって指導者を観察しているのである。

特に、社会性の育成については、模倣しようとするモデルが幼児の身近に存在することが最も効果的であるだけに、まず、指導者自身が望ましい社会性についてイメージできていることが大切である。

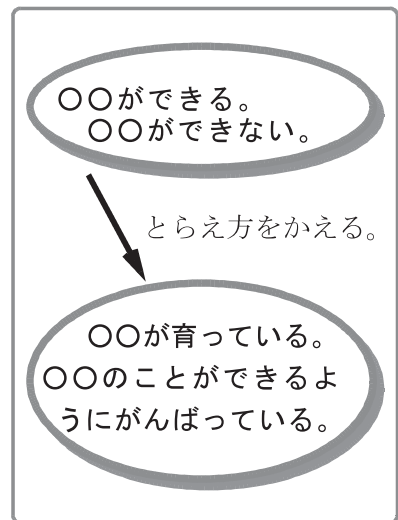
そのために幼稚園では、指導者同士が連携し、例えばティーム保育を積極的に実践していくことも必要となる。幼児の社会性の発達について多面的にとらえることができ、指導者間の幼児理解のためのコミュニケーションを充実させていくことにもつながる。一方、ティーム保育を幼児の側からみれば、指導者の協力し合っている姿は、幼児同士が友達と協力し合って遊ぶことのモデルとなり、自己表現、他者理解・関心、集団参加などの力を引き出すことにつながる。こういったモデルとの出会いは、幼児の社会性の育成にはとてもよいことである。

### ④ 発達段階に即した幼児理解に努める

幼児の社会性の育成は、単に「〇〇ができる・できない」的な発想でとらえるのではなく、「〇〇が育っている・〇〇のことができるようにがんばっている・〇〇の育ちの芽生えがみられる」などの発達観に基づいた発想でとらえることが必要である。そして、幼児の心に「みんなと一緒に〇〇をしたい」などと、友達との遊びを楽しみにする期待感を育てることが大切となる。

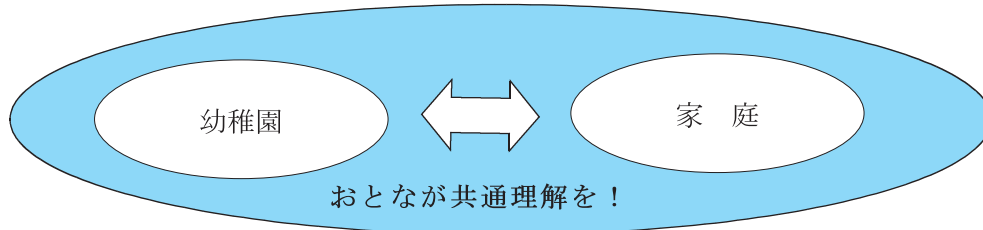
そのためには、小学校以降を見通しながら社会性の芽生えをとらえていく努力が求められている。

さらに、障害のある幼児の保育については、障害の状態は一人一人異なるものであることを理解した上で、生活経験の程度などの実態を的確に把握するように努める必要がある。そして、その子の特性等をどのように生かしながら、自己表現や集団参加の力をはぐくみ、生活経験を豊かにしていくか、あるいは健康安全をどのように確保していくかについて、幼稚園全体での共通理解と協力体制を整えることが大切である。



## ⑤ 家庭との連携を大切にする

家庭における子育ては、からだ育てや基本的な生活習慣の確立、社会性の育成などの考え方をはじめ、人権意識や人権感覚など、保護者の多様な価値観に基づいているため、幼稚園での保育との間にズレが生じることがある。



そのため、日ごろから幼稚園として、幼児の望ましい発達や保育の考え方をいかに保護者に伝え、説明するかが重要になる。

例えば、幼児同士のトラブルを報告する場合でも、幼児の共感する力や集団参加の意欲の育ちを合わせて伝えたり、指導者や相手に説明しようとする自己表現の力が見られるようになってきたなどの意味付けをしたりすることが大切である。

こうした日常の連携が指導者も保護者も共に幼児の成長を願い、その子の成長への喜びを共有することにつながるのである。

## 事例編

### 事例7 園内研修において事例を活用し指導者の資質を高める

園内研修の場において、様々な事例に基づいてそれぞれの意見や考えを出し合いながら、子どもへのかかわりについて話し合う場をもつことが大切である。ここでは、「子どもの自己表現力を育てる」という視点について、具体的な保育の進め方を研修する事例をあげる。

#### 〔3年保育3歳児の事例〕

3歳児の保育室。

A「もう！！」B「もう！！」と、二人が言い合っている。

T「どうしたの？」と、二人にたずねてみると

A「Bちゃんが押してきたの。」

B「Aちゃんが押したから、ぼくもAちゃんを押したんだ。」

教師はAに「『一番初めに押してきたのは、Aさんだ。』とBさんは言っているけど、本当かな？」と聞くが、Aは黙っている。

周りの子どもにも、「AさんとBさんが『押した！』って言い合っているのだけど、見ていた人はいるかな？」と聞いてみるが、だれも状況を見ていなかったようだ。

そこで、AとBに、「お友達から押されたら痛いよね。いやだよ。ごめんなさいってあやまろう。」と促した。

数日後、Aの母親が教師に、「先日、BちゃんがAを押したのに先生の前でBちゃんは『Aが押した。』と嘘をついたそうです。Aは『自分が悪いことをしていないのに、謝るのがとても嫌だった。』と言っています。」と言いに来られた。

Aの母親には、Aを疑い、強引に謝らせたことをわびた。